

日本留学による日本イメージの変容

2名の台湾人留学生の事例から

平田真理子
孫 愛維

1. はじめに

グローバル化が進む今日、留学生の数は大学の国際化の指標として扱われている。日本には2008年に文部科学省が策定した外国人留学生を2020年までに30万人にする「留学生30万人計画」があり、今後も留学生の数は増加することが予想される。一方、台湾の教育部（文部科学省に相当）も海外留学や海外研修を行う大学生を対象とした「學海計画」等の奨学金制度を制定しており、海外生活を通して、異文化理解能力と外国語能力を向上させ、国際的に活躍できる人材の育成を目指している。しかし、大西（2016）に指摘されているように、留学生数の増加は大学を国際化に導いていくとは限らない。留学生の送り出しと受け入れの状況を正しく把握した上で、適切な教育支援に取り組んでいく必要がある。

台湾は親日の人が多いことで知られており、日本台湾交流協会が実施している「台湾における対日世論調査」では、日本は連続5回最も好きな国となっている。2015年度の調査では全ての年齢層において50%以上の人が日本を最も好きな国であると回答しており、日本に親しみを感ずると答えた人は80%に上っている。日本の流行や文化、物事に夢中になる「哈日族（ハーリーズ）」と呼ばれる若い人々も多い。このような社会背景から日本を留学先に選ぶ台湾人大学生は少なくない。実際に、2018年度に海外に留学した台湾人学生67,688人のうち、日本に留学しているのは10,347人であり、この数はアメリカの21,516人、オーストラリアの18,227人について第3位となっているⁱ（台湾教育部國際及兩岸教育司、2018）。一方、日本に在籍する外国人留学生の数を見ても、台湾人留学生は出身国（地域）別で第5位（日本学生支援機構、2018）となっている。

本稿では日本に留学した台湾人大学生を対象に日本留学前後の日本イメー

ジと留学後の就職先を調査し、留学によって彼らの日本イメージは変容するか、変容するとすればそれはどのようなものかを明らかにした。そして、この結果をもとに留学生への支援や教師として留意すべき点の提示を目指す。

2. 先行研究の概観と研究目的

台湾人における日本イメージについてはいくつかの先行研究に言及があるが（甲斐 1995; 篠原 2003; 加賀美ら 2009、2011、2016; 守谷ら 2011）、台湾の若い世代の日本に対する好感度は概して高いことが導き出されている（甲斐 1995; 篠原 2003; 加賀美ら 2009、2011、2016）。

また、日本イメージの形成については、日本語の学習と日本への渡航経験の有無、日本留学経験、日本への関心度と知識、家庭環境、日本の大衆文化など多様な要因に影響されていることが明らかにされている（加賀美ら 2009、2011、2016; 守谷ら 2011）。

一方で、加賀美ら（2011）において、イメージに関しては新しい状況におかれると、以前はなかった視点が形成される可能性があることが指摘されている。

しかし、先行研究は主に台湾在住台湾人のみの1回限りの一般性を求める量的研究で、イメージの変化は研究の射程に組み込まれていない。日本イメージの変化に与える影響を探るためには、加賀見ら（2011）の指摘を踏まえ、多方面にわたる日本に関する知識や経験を獲得できる日本留学についての調査をする必要がある。

また、アンケート調査で130名の台湾人留学生の日本留学におけるカルチャーショックを調査した葉・王（2011）も、全体として日本留学生活には満足しているように見えるが、一人ひとりの回答について詳細に見ていくと、ばらつきが大きいと報告している。つまり、留学は個々人固有の経験であり著しい個人差があるが、その個人独自の特徴は、集団による平均値や統計措置では捨象されるおそれがある。よって、質問調査からつかみにくい個人差を詳しく探求する必要性が考えられる。

以上の問題意識に基づいて、本稿では、質的手法である個人別態度構造分析（Personal Attitude Construct Analysis：PAC分析）と半構造化インタビュー（semi-structured interview）を用いて、台湾人大学生を対象に渡航前と帰国後の日本イメージを調査し、それを手がかりに以下の課題について明らかにす

る。

- ①日本留学を経て、維持または深化する日本イメージがあるか。
- ②日本留学を経て、消失または新出する日本イメージがあるか。
- ③日本イメージの形成や変容に影響を与える要因は何か。

1. で述べた日本へ留学する台湾人学生の数を見ると、日本の大学構内での日本人学生と台湾人留学生との接触機会は頻繁にあると推測される。よって、①～③により維持されるイメージと変化するイメージ及びその影響要因を明らかにすることで、留学前の指導に役立つ知見が得られるだろう。

3. 調査概要

3.1 調査方法

本稿では内藤（2002）によって開発された PAC 分析ⁱⁱと半構造化インタビューを採用した。その理由は以下の2点である。第1点は、調査対象者による自由連想やクラスター分析を用いる PAC 分析は、事例記述的手法と統計的手法の両者が包摂された分析である点である。調査対象者の個人的経験や独自の内面構造に関する豊かな情報をもたらしてくれると同時に、他の質的研究方法より調査者の恣意的推測と解釈が回避できる。また、クラスター分析という統計手法からインタビューのたたき台を提供でき、客観的に分析することができる（内藤 2002）。第2点は、PAC 分析は調査対象者の解釈がデンドログラム（樹状図）に基づくためイメージの全貌がわかりやすい。よって、留学前後の変化を検討する本稿のような場合、PAC 分析は他研究手法より調査対象者のイメージの変容を示しやすいと考えられることである。

3.2 調査の手続き

調査対象に対して、留学する約2ヶ月前（2011年7月上旬）と留学終了後約1ヶ月が経過した時点（2012年9月下旬）の2回に渡って PAC 分析を行い、日本イメージがどのように変容するかを探った。そして、留学終了約4年半後（2017年1月上旬）に半構造化インタビューのみで調査対象者の現況及び現在の日本イメージを確認した。半構造化インタビューのみとなったのは、調査対象者が PAC 分析を行う時間が取れなかったことによる。

調査を行った時期と種類は表1の通りである。

表 1 調査の時期と種類

	PAC 分析	半構造化インタビュー
留学開始 2 ヶ月前	✓	✓
留学終了 1 ヶ月後	✓	✓
留学終了 4 年後	×	✓

調査での使用言語は調査対象者の母語である中国語で、調査対象者の承諾を得た上で、以下の PAC 分析の③と半構造化インタビューの内容を IC レコーダーに録音して、文字起こしを行った。

PAC 分析は内藤 (2002) を参考にして、以下のような手順にしたがって行った。

①自由連想を引き出す刺激文は以下の通りである。

〈刺激文〉「あなたは、『日本・日本社会・日本人』についてどんなイメージを持っていますか。テレビの番組・ドラマ・ニュース・小説などを通して日本・日本社会・日本人はどんな民族であると思いますか。職場・学校・日常生活などの場面で日本人と出会って、付き合った時、あなたはどんな気持ちになると思いますか。そういったことを含めてあなたが『日本・日本社会・日本人』という言葉聞いて思い浮かべるキーワードやイメージを自由に書いてください」

以上の刺激文を提示した後、想起した項目をパソコンに入力してもらった。なお、「日本・日本社会・日本人」に対するイメージという刺激文では表層的な様相しか現れない恐れがあるため、刺激文の段階では詳細な記述にし、連想語に広く思考が表れるように配慮した。また、イメージの変容を比較しやすくするため、留学前後の調査共にほぼ同じ刺激文を利用したが、留学後の刺激文では冒頭に「日本留学後の現在」という文を付け加えた。

②調査対象者に自由連想で思いつく項目の重要順位を判定してもらい、項目間の類似度を「1 かなり近い」から「7 かなり遠い」の 7 段階尺度で評定してもらった。それを基に得た類似度行列の結果に対して、SPSS (15.0) でクラスター分析を実施した。

③クラスター分析で得たデンドログラムを基に調査対象者にクラスターを分けて命名してもらった。クラスターに基づき、調査対象者へインタビューした。

- ④項目ごとにそれぞれのイメージが、プラス、マイナス、どちらともいえない、のどれに該当するかを判断してもらった。
- ⑤ PAC 分析の後に半構造化インタビューを実施した。まず留学前に今まで日本人と接した経験、留学動機、不安などについて聞いた。次に留学終了1ヶ月後に、留学先の支援システム、日本人との交流経験、困難に対する対処法、感想などについて質問し、帰国4年半後に半構造化インタビューを実施して、その時点での日本イメージⁱⁱⁱ、留学経験が就職先の決定や職場での生活に与える影響などを回答してもらった。

3.3 調査対象者

縦断的調査の対象者は6名である。6名の留学先は全てチューターなどの留学生支援システムが整備されていた。6名のプロフィールは表2に示す。なお、調査対象者のプライバシーに配慮し、必要最低限の情報のみ記す。その中で言語能力が一番高く、留学前のPAC分析では好意的な日本イメージを持っていたが、留学後の日本イメージが異なる変化を示していたKとSの2名を比較することとした。

表2 対象者のプロフィール

仮名	K	S	E	R	Y	N
学年	3年生	3年生	3年生	3年生	4年生	4年生
性別	女	女	男	男	女	女
SPOTの点数	58	57	52	46	12	23
渡日経験(回数)	遊学(1回)	観光(1回)	観光(1回)	観光(数回)	観光(1回)	観光(数回)
台湾での専攻学科	応用日本語学科	応用日本語学科	応用日本語学科	応用英語学科(副専攻: 応用日本語学科)	応用英語学科(副専攻: 応用日本語学科)	応用英語学科(副専攻: 応用日本語学科)
留学先の授業での使用言語	日本語	日本語	日本語	英語(別科: 日本語)	英語(別科: 日本語)	英語(別科: 日本語)
日本留学中のアルバイト	通訳	弁当屋	居酒屋	なし	家庭教師	家庭教師
就職先	日本就職	貿易会社	旅行会社	塾	貿易会社	高校

4. 研究結果と考察

以下、K と S の結果を述べる。図式については、各項目の前の (+)、(-)、(○) は項目に対するプラス、マイナス、中立を示しており、後ろの数字は重要順位である。また、項目名は []、クラスター名は 【】、全体のイメージは < >、調査対象者の発言は □ に示す。

4.1 K の分析結果

4.1.1 K の留学前：完璧な国（図 1）

留学前の PAC 分析の結果は図 1 のようになった。項目は 16 項目で、K はこれらの項目を【日本社会】、【礼儀】、【日本企業】、【完璧主義】という 4 つのクラスターに分けている。全体のイメージは < 完璧な国 > である。クラスター 1 は [保守的] と [集団主義] からなり、【日本社会】とイメージ付けされた。K は次のように述べている。

ドラマなどでよく見るが、「出る杭は打たれる」のように、個人よりチームプレーが重要視されている。そして、画一的な行動が求められる。なるべく他人と違う行動は取らないとか。

クラスター 2 の【礼儀】は重要順位 1、2、5 の項目を含み、K は次のように語っている。

台湾人の教師に比べて、日本人の教師は特に時間を守る。いつも授業の前に、既に教室で待っていて、ベルが鳴ったらすぐ出席を取る。(中略) よく言われていることだが、初対面の時、台湾人はよく恋人はいるかとか、給料はいくらかなどプライバシーに関わることも平気で聞くが、日本人にとってはこれは失礼な行為である。

クラスター 3 は【日本企業】と命名された。[家電製品が有名] と [エコ製品] の 2 項目からなる。K は次のように答えている。

日本の企業の製品、特に Sony、Panasonic などの家電企業の製品は丁寧にデザインされていて、とても使いやすい。値段は少し高いが、それに相応する価値がある。そして、他国の企業と比べて節電できる環境に配慮した製品が多いと思う。

[几帳面]、[綺麗な環境] と [漫画が有名] などの 6 項目を含むクラスター 4 は【完璧主義】と名づけられた。K は次のように説明している。

聞いた話では、日本人は段取りが好きな A 型の人が一番多いそうである。そして、日本で観光した時、どこへ行っても綺麗だった。また、化粧しないと出かけないとか、外観の完璧さを求める化粧主義をよく聞いている。漫画も精緻な画風で人々を魅了している。(中略) 以前、『おもひでぽろぽろ』というアニメを見たことがあるが、その中でお父さんはお母さんに「ご飯」、「お風呂」と命令し、お母さんは優しく微笑んで「はい」と答えていたことが印象深かった。また、ドラマで夫や恋人に誤解されて悲しくなった時でも、女性には弁解せずただ静かに涙を流している。いつでも完璧な女性のイメージを守る必要があるようだ。

Kの発言を整理すると、留学前のイメージの形成要因は、【日本社会】はドラマ、【礼儀】は伝聞と授業での日本人教師との接触、【日本企業】は日本製品の使用経験と広告、【完璧主義】は伝聞、短期の遊学経験、漫画、アニメとドラマである。

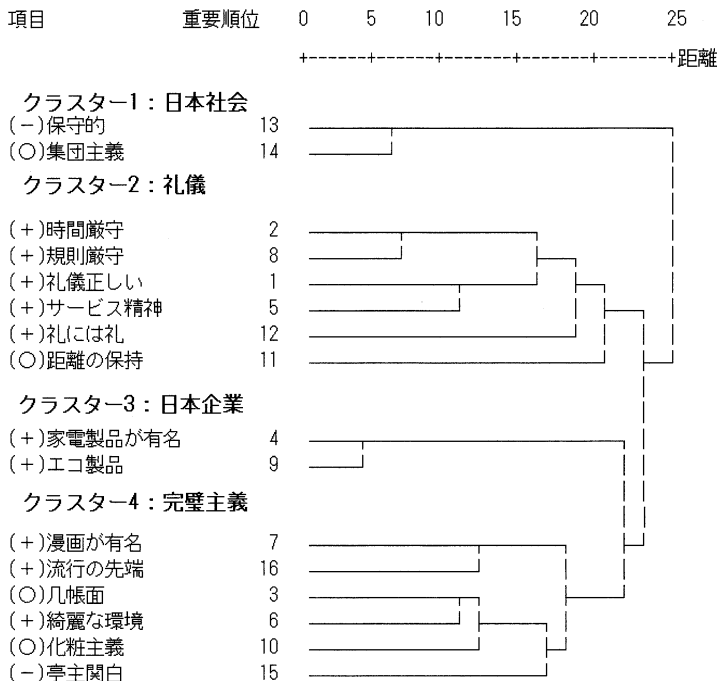


図1 Kの留学前のPAC分析の結果

4.1.2 Kの留学後：礼儀と美意識が強い国（図2）

留学後のPAC分析の結果は図2のようになった。Kの項目は25項目で、【礼儀】、【日本社会（集団主義）】、【食文化】、【交通マナー】と【完璧主義】という5つのクラスターに分けることができた。全体イメージは＜礼儀と美意識が強い国＞である。

クラスター1の【礼儀】について、Kは以下のように述べている。

ある日、プレゼントを買いにデパートへ行った。全部で1500円ぐらいのものをを買っただけで、無料で綺麗に包んでくれ、しかも店の外まで送ってくれた。また、雨の時に電車に乗ると、傘を忘れないようにというアナウンスが入る。サービス精神に本当に感心している。

クラスター2は「先輩に反抗しない」、[全員一斉行動]と「目立たないように」からなり、【日本社会（集団主義）】とイメージ付けされた。Kは次のように解釈している。

部活に入ったことがある。そこでの先輩・後輩という上下関係は思ったより強かった。自分の意見があっても、基本的に先輩の意思に従う。また、必ず全員一斉に行動する。例えば、食事する時、他の人が注文した料理も揃ってから、全員一斉に食事する。

クラスター3は「味噌汁つきの朝食」、[冷たいものが多い]、[スーパーでの買い物]などから構成される【食文化】である。Kは以下のように説明している。

日本食には慣れないところもある。例えば、正月は冷たいお節料理ばかり。でも若者はみんな伝統的な日本食より洋食が好きみたいで、イタリアンレストランが特に多い。そして、台湾と違ってみんなスーパーで買い物する。

クラスター4は「バス内で飲食しない」、[マナーモードに設定]と「電車内で話さない」という3つの項目からなり、【交通マナー】と命名された。Kは以下のように言っている。

これはクラスター1と共に礼儀に関わるものだが、クラスター4は特に電車・バスなどの公共交通機関を利用する際に関する礼儀である。

「綺麗な環境」、[外観重視]と「美意識」などの7項目を含むクラスター5は【完璧主義】と見なされている。Kは次のように話している。

日本は究極の美を求める民族である。それは茶道、日本製品、漫画などから感じられる。また女性は自分の好みがそれほどなく男性の視線を美の基準にする傾向があるが、化粧せず出掛ける女性は多かった。

Kの話から、留学後のイメージは日本で滞在した際、人との交流、出会ったこと、見聞きした直接経験から築き上げたことがわかった。日本留学を終え、台湾に戻ったKは大学卒業後、日本留学の経験を生かせる仕事を積極的に探した。そして、まず日本との業務がある台湾企業に勤め、2年後に念願だった日本での就職を果たした。帰国4年半後の日本イメージについて、Kは以下のように述べており、日本人に対する画一的な見方から、個人差や多様性に目を向け始める見方に変化する様子が見られた。

日本人は親しくなるのに時間がかかる傾向があるが、いろいろな日本人に接してみると、親切で大らかな人もいれば、冷たくて神経質な人もいるのがわかり、日本人だからこうだという考えは私の中で薄れてきている。

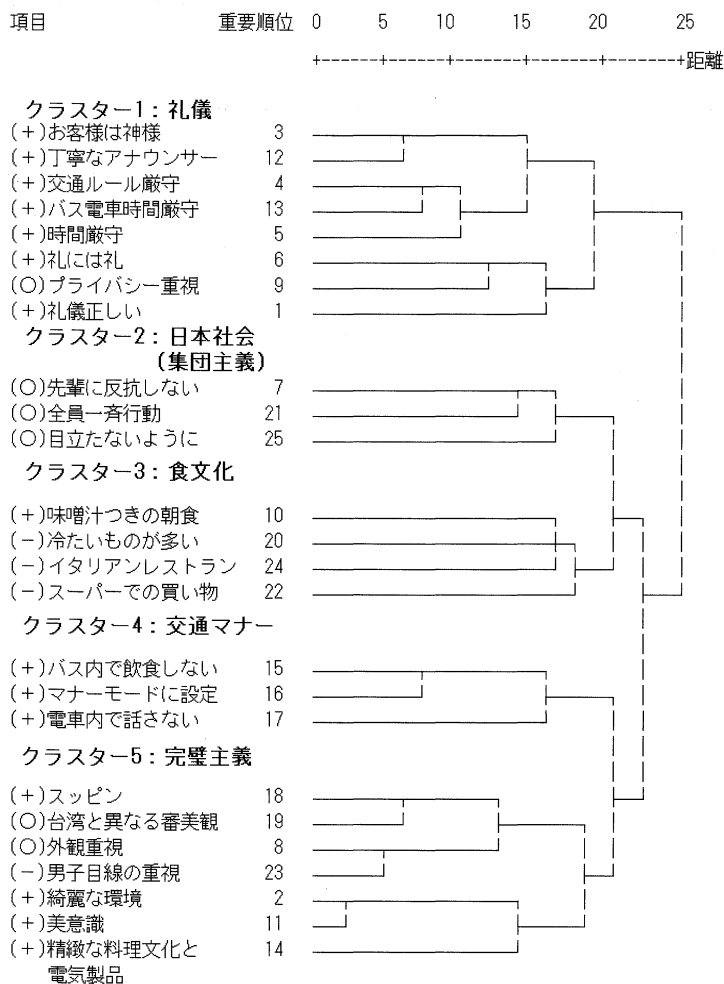


図2 Kの留学後のPAC分析の結果

4.2 Sの分析結果

4.2.1 Sの留学前：憧れの国（図3）

留学前の14項目は【人との付き合い】、【先進国】と【完璧の追求】という3つのクラスターに分かれている。全体としてのイメージは＜憧れの国＞である。

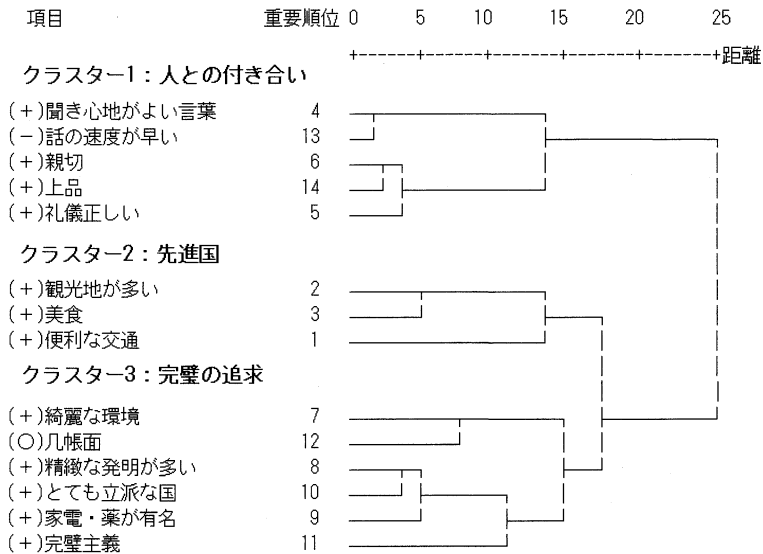


図3 Sの留学前のPAC分析の結果

〔聞き心地がよい言葉〕、〔親切〕と〔礼儀正しい〕などの5項目を含むクラスター1は【人との付き合い】と見なされている。Sは次のように説明している。

日本語を学ぶ前から、男女を問わず日本人の語調が柔らかだという印象があった。意味はわからなくとも、日本のテレビ番組、ドラマ、アニメなどの日本語から、耳障りとか乱暴とかといった感じを受けなかった。日本語学習後、その印象はさらに深くなった。(中略) 日本人の先生は皆穏やかで、努力しており、古い伝統と規律を重視するいい人達である。でも、話のスピードが速くてついていけない。

〔観光地が多い〕、〔美食〕と〔便利な交通〕の項目を含むクラスター2は【先進国】と名づけられており、Sによればこのクラスターは最も大切な概念で、次のように述べている。

京都へ観光に行った時、元々は目立たない場所でも人の目と心を惹く観光地にされていることに気が付いた。また、その周辺は交通が便利でかつ多様な料理があり、何回も観光したいと思う場所が多い。先進国でしかできない質の高い産業と工夫である。

クラスター3は「綺麗な環境」、「精緻な発明が多い」と「家電・薬が有名」などの6項目からなり、【完璧の追求】と解釈されている。Sは次のように説明している。

京都の環境の綺麗さにびっくりした。本当に塵ひとつないぐらいであった。(中略)商品と薬は日本製であることがわかると、値段が高くてでもそれを買う。なぜなら工夫に富み、デザインも練られていて、商品の安全性も保証されているからである。

Sの説明から留学前のイメージに影響をもたらす要因をまとめると、【人との付き合い】はテレビ番組、ドラマ、アニメと日本人教師、【先進国】は観光経験、【完璧の追求】は日本製品と観光経験である。

4.2.2 Sの留学後：いい観光地（図4）

留学後の10項目は【人との付き合い】、【先進国】と【消費が活発な国】という3つのクラスターに分けられる。全体のイメージは＜いい観光地＞である。

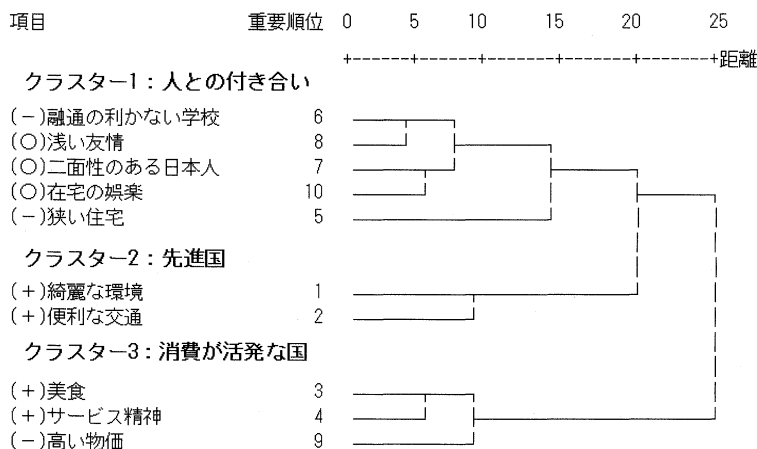


図4 Sの留学後のPAC分析の結果

クラスター1は「融通の利かない学校」と「二面性のある日本人」などのマイナスと中立のイメージを持つ項目で、【人との付き合い】と名づけられている。

次に示すように、Sは観光での短期滞在と留学などの長期滞在で得たイメージの差が大きいと言っている。

日本人は親切でやり方も丁寧だが、融通が利かない場合もある。例えば、私がいた学校では、どんな書類でも申請には3日間必要というルールがあった。たとえ判子一つ押せばよく1日のできる場合でも、3日後に来てくださいと言われる。本当にルールに縛られていて、柔軟に対応できない。(中略)授業中は日本人の学生と仲良くしていても、授業の後は皆すぐ帰ってしまって、気心の知れた仲間が作れない。(中略)日本人は建前と本音とがかけ離れている。アルバイト先では、私の前では日本語が上手ですねと褒めてくれたのに、裏では日本語が下手で手際が悪いと批判していて、本当に傷ついた。前観光した時は日本のいい面ばかりが見えたが、日本に長く住むとだんだん好きではない面も見えてきた。

この発言から、日本イメージに影響を与える要因は、篠原(2003)が指摘している渡航経験の有無よりもむしろ滞在先での日本人との接触の有様であると考えられる。また、「二面性」や以下に引用する「本音」「裏」という表現から、Sはこれまで日本人教師や、日本観光中に出会ったサービス業従事者など、日本人の「公」の部分しか見ていなかったことがわかる。そして留学後、日本人の「公」ではない世界、つまり「私」の世界を初めて認識したと考えられる。この点は日本や日本人と深く関わったことがなかったKも同じであろうと思われるが、Sの「好きではない面も見えてきた」という言葉から、Sはこの日本人の「私」の世界を受け入れることができなかったことがうかがえる。

さらに、Sはこのような見解を一般化し、帰国4年半後のインタビューでも日本人を否定的に捉えた考えを維持しており、それが就職先の選択にも影響している様子が見られた。

日本人は表面上は親切だが、親友になるのは本当に難しい。それは私だけの考えではなく、他の留学生からもなかなか日本人と親友になれないと聞いた。日本人と長時間一緒にいるとストレスがたまるため、日系企業ではなく、日本との業務がある台湾企業に勤めることにした。

クラスター2は【先進国】と名づけられており、Sは次のように述べている。

留学中、いろいろなところへ観光に行った。どこへ行っても、塵一つなく綺麗だった。そして交通もかなり便利で、車を持っていなくてもどこでも行ける。

クラスター3は【消費が活発な国】と解釈され、Sは次のように説明している。

店での買い物とか、レストランで食事する時などに、日本のサービス精神が感じられる。ただし、物価が少し高い。お金がないと、日本ではいい生活が送れないと思う。

Sの話から、留学後のイメージは日本で滞在した際の人との交流、出会ったことなどの直接経験から築き上げたことがわかった。また、長期かつ多方面での交流体験などから得た直接的な知識はより具体的なイメージ形成につながるだけでなく、それは間接的な知識に基づいたイメージを覆い、帰国してから4年が経過しても維持される可能性を示唆している。

4.3 結果のまとめと考察

以上、K、S共に渡航前には好意的な日本イメージを有していたが、渡航後は異なる変化を呈していることがわかった。また、KとSの日本イメージの変化は日本留学によって単に好転するか悪化するかという単純な二者択一的なものではなく、複雑化していることが明らかになった。留学前後におけるクラスターと項目の数と評価の変化は表3のようにまとめられる。Kの場合、数に関しては、クラスターは4つから5つ、16項目から25項目に増え、細分化・複雑化するプロセスを示した。項目評価については、渡航前のプラスは62.5%であるが、帰国後のプラスも60%を占めており、留学前後の変化があまりなく、プラスのイメージを依然として維持していることが読み取れる。

一方、Sの場合、クラスターの数は留学前後同じく3つであるが、項目は14から10に減少し、項目評価も渡航前の中立とマイナス評価が少数(14.2%)であるのに対して、帰国後は過半数を占め(60%)、しかも主に【人との付き合い】に属する項目で、Sは留学を経て特に日本人に対する評価が低下する傾向が見られた。

表3 留学前後におけるクラスターと項目の数と評価

	K		S	
	留学前	留学後	留学前	留学後
数	クラスター：4 項目：16	クラスター：5 項目：25	クラスター：3 項目：14	クラスター：3 項目：10

評価	プラス : 62.5%	プラス : 60%	プラス : 85.7%	プラス : 40%
	中立 : 25%	中立 : 24%	中立 : 7.1%	中立 : 30%
	マイナス : 12.5%	マイナス : 16%	マイナス : 7.1%	マイナス : 30%

これらの変化から、渡日後の実体験により日本イメージが深まったり維持されたりする場合もあれば、それが覆されたり新たに形成されたりする場合もあることが明らかになった。

以下、研究課題に沿って結果と考察を述べていく。

研究課題①日本留学を経て、維持または深化する日本イメージがあるか。

K の場合、維持または深化するクラスターとしては、留学前にメディアから抽象的な概念を得て形成されていた【日本社会】と【完璧主義】が、留学後現地で見聞きしたことと自分の経験に裏付けられた【日本社会(集団主義)】と【完璧主義】に移行した。例えば、項目の内容表現は「集団主義」から「全員一斉行動」と「目立たないように」のように具体化する傾向が現れた。また、留学前の【礼儀】は留学後対人態度及び振る舞いに関わる【礼儀】と公共交通機関に乗る際の【交通マナー】に二分されている。そして、K の「綺麗な環境」も留学前の重要順位 6 から留学後の重要順位 2 にまで上がり、日本留学によってさらに印象付けられることがうかがえる。S においても「綺麗な環境」と「便利な交通」を含む【先進国】というクラスターはそのまま維持されている。また、S の「綺麗な環境」も留学前の重要順位 7 から留学後の重要順位 1 にまで上がっており、K と類似した傾向が見られる。

以上、研究課題①への答えとして、日本留学を経て維持または深化する日本イメージがあることが示唆された。また、K、S とともに、日本人に関連するもの以外は帰国後も概して好イメージに変化が見られないことが明らかになった。加賀美ら（2011）においても先端技術・豊かさを示す「先進的影響力」が学年の上昇に伴い段階的に強く感じられている傾向が観察されている。この結果を本稿の結果と併せると、先進国などに関わるイメージに関しては、日本留学による実体験を得ても、留学前に学校教育やメディアなどで蓄積された知識が変容せず維持される、あるいは深化することがうかがえる。台湾はかつて 50 年にわたって日本統治時代を経験しており、日本との経済的・文化的繋がりが深く、日本文化に親しみやすいという社会的心理基盤がある。また、台湾の中学校の教科書^{iv}では日本統治下で行ったインフラ整備や伝染

病根絶活動、日本語教育の普及活動が取り上げられており、日本を高度な技術水準を持った先進国と認識する人がいることが影響している可能性も考えられる。

研究課題②日本留学を経て、消失または新出する日本イメージがあるか。

K の場合、留学前の【日本企業】と〔漫画が有名〕が消滅し、【完璧主義】に組み込まれたのに対して、【食文化】と〔スッピン〕が新出した。また、日本に滞在し多様な日本人との接触が増えることで、もともと抱いていた日本人に対するイメージが崩れ、新たなイメージに変容したことが見られた。例として、K の発言から留学後〔亭主関白〕が消え日本人男性に対するイメージが変わったことが挙げられる。

以前は厳父慈母、主導権を握る父親の日本イメージが強かったが、留学後それが変わった。かかあ天下とまでは言えないが、教会や友達の中で自分の奥さんあるいは彼女の決定に素直に従う草食系の日本人男性が多く見られた。以前は日本人男性のことはあまり好きではなくて、彼らとちょっと距離を置いていた。でも、女性の意見を尊重したり、女性に親切にしたりする日本人男性と接して印象が変わった。

S の場合、【完璧の追求】が消え、【消費が活発な国】が出現し、【人との付き合い】もネガティブに捉えるようになった。これらの変化と関連して、留学前の【人との付き合い】に属する〔親切〕、〔上品〕と〔礼儀正しい〕など日本人に対する肯定的な項目が留学後は消滅し、〔融通の利かない学校〕、〔浅い友情〕と〔二面性のある日本人〕などのマイナスと中立のイメージを持つ項目となり、日本人との直接的な接触時間の増加が日本人に関する否定評価を助長することが示唆された。また、項目の評価も渡航前のプラス評価が大半（85.7%）であるのに対して、帰国後は4項目のみプラス（40%）で、全体イメージも＜憧れの国＞から＜いい観光地＞に変化したことから、S は留学を経て日本に対する評価が低下する傾向が見られた。S のこのような変容の様子は、守谷ら（2011）と加賀美ら（2016）のドラマなどを通して構築された好意的な日本イメージと実際に体験する日本との間にずれが生じた際に、失望感と否定的な日本イメージをより強く意識するという見解に類似している。

以上から、研究課題②への答えとして、日本留学を経て消失または新出する日本イメージがあることが示唆された。KとSともに日本と直接接触ができる留学によって、特に日本人に関するイメージが変化したことが明らかになった。しかし、Sと異なり、留学後のKには守谷ら(2011)と加賀美ら(2016)に指摘されたような日本人に関するイメージの悪化は見られず、留学前に抱いていた「亭主関白」というマイナスイメージが崩れ、日本人に対するイメージが好転した様子が見られた。

では、なぜ留学前は言語能力が同等で、日本に肯定的なイメージを抱いていたKとSの間に異なる結果が見られたのだろうか。その相違が生じた要因について研究課題③で検討していく。

研究課題③日本イメージの形成や変容に影響を与える要因は何か。

ここまで留学前後のKとSの日本イメージの変化について述べてきたが、研究課題③の答えとして、日本イメージの形成と変容に影響を与える要因は表4にまとめられる。

日本イメージの形成要因は、KとSとも留学前はテレビ番組・漫画・伝聞などによる間接的な経験と、ごく限られた範囲での直接的な経験であったが、留学後は主に実際の日本での生活を通して体験を重ねる直接的な経験であり、他律的な日本イメージから自律的な日本イメージへ変容したと言える。

表4 クラスターと項目の維持・消失・新出

	K		S	
	クラスター・項目	要因	クラスター・項目	要因
維持・深化	礼儀	留学前：伝聞と日本人教師との接触 留学後：留学時代の経験（買い物、電車の利用経験）	先進国	留学前：観光経験
	完璧主義	留学前：伝聞・遊学・漫画・アニメ 留学後：留学時代の経験（茶道、日本製品、漫画）		留学後：留学時代の経験（生活、観光）
	日本社会	留学前：ドラマ 留学後：留学時代の経験（部活）		
消失	日本企業	日本製品の使用経験と広告	完璧の追求	日本製品・観光経験
	亭主関白	アニメ	人との付き合い（親切、礼儀正しい、上品）	テレビ番組・ドラマ・アニメ・日本人の教師
	漫画が有名	漫画		
新出	食文化	留学時代の経験（食事経験）	消費が活発な国	留学時代の経験（買い物、食事）
	交通マナー	留学時代の経験（バス、電車の利用経験）	人との付き合い（融通の利かない学校、浅い友情、二面性）	留学時代の経験（アルバイト、学校、クラスメート、チューター）
	スッピン	留学時代の経験		

Kの日本人に対するイメージが好意的であるのに対して、Sはより批判的に日本人を評価しており、KとSのイメージの変容は異なる様相を呈している。KとSは共に幼少期から日本に憧れ、留学前の言語能力も同等で、肯定

的な日本イメージを抱いており、留学した先も留学生に対する支援が整備されていた。このように多くの共通点を持っているKとSの間に、なぜ異なる結果が見られたのであろうか。留学生の適応問題は不十分な言語能力によるものとされがちだが、Sに言語能力の不足による苛立ちがないことは言語以外の要因の存在を示唆している。インタビューの分析から、KとSの相違が生じたのは日本人とのコミュニケーションの成功経験の有無によると推測できる。

Kは渡日後、チューターとは親密な関係の構築には至らなかったものの、キリスト教の教会に入ったり、大学でも中国語や中国文化に興味を持つ日本人が多いと予想される中国古典文学の授業を履修したりして、日本人と親しくなった。このように日本人と付き合っていた経験がKの肯定的な日本人イメージに反映されていることが考えられる。また、以下の例のように、Kは挫折に遭遇した際、日本人の友人のサポートで、問題を回避せず、状況に合わせて原因を見つけ対策をとることができた。この友人は教会で出会った台湾のことが大好きだという女性であった。

中国古典文学の成績は思ったほどよくなかった。他のクラスメートより中国古典文学に詳しいはずなのに。いくら考えても理由が分からないので、教会のおばさんがくれた意見の通りに、勇気をもって先生にメールを出してみた。その先生の授業が好きで履修し続けたいから。先生は返信の中ですごく丁寧に理由を説明してくれたので、納得できた。

一方、Sは日本へ行ったらすぐに日本人の友達ができると思い、日本人との親密な関係の構築を望んでいたにもかかわらず、積極的に自分から近づく要領がわからなかったため、表面的な関係のままに終わったと語っていた。これは前述した「浅い友情」の項目に該当するとSは述べている。

チューターには入学の初期や入国の手続きの時、かなり手伝って親切にしてもらったが、専攻は私と異なり、大学構内でほとんど会えなかった。そしてかなりの時間アルバイトをしていたようだ。そのため、私と会うことが彼女に負担をかけるかと思ったので、積極的に誘うことに気が引け、学期が始まったらもう会えなくなった。(中略)チューターも私を誘うことが少なかった。(中略)チューターは学校が主催した交流会に参加したが、途中で退席した。関心がなかったようだ。もっと積極的に働きかけてほしかった。(中略)授業の後日本人の学生はすぐ帰ってしまい、仲間関係が作りにくい。(中略)

校内のイベントに参加しても、留学生が中心で日本人学生はいなかった。日本人の学生は国際交流にあまり興味がないように思う。

なぜSは日本人と親密な関係が構築できなかったのか。それにはSの性格以外に次の2点が理由として考えられる。第一に、チューターやその他の日本人学生が、留学生であるSに対し理解、共感できにくかったと思われる点である。Sのチューターは当時留学経験がなく、Sのような留学生との付き合いもそれまでなかったため、Sはチューターから精神的な支援を得にくかったと推測される。第二に、チューターと日本人学生に国際交流を楽しむ様子が感じられない点である。Sのチューターと日本人学生が国際交流会に積極的に参加する姿が見られないため、Sはチューターや日本人学生との関係構築に向けての一步をなかなか踏み出せなかったことがうかがえる。

以上、KとSの事例から、日本人に関する好否のイメージ形成には留学中での日本人との交渉経験が関与している可能性が示唆された。Kは現状を分析し相手に働きかけ問題を解決できたという成功経験があり、それを日本人と積極的に交流する原動力に変えている。この結果、Kは好意的な日本人のイメージを維持したり、さらに好転させたりしたと推測される。このように周囲との人間関係が深化したり、Kの活動の場が広がったりすることは、K自身の人間的成長をも促す。一方、留学前日本に対する憧れを膨らませてきたSの場合は、期待と体験の不一致が否定的なイメージの形成につながったことが推測される。

5. 総合的考察および今後の課題

本稿により、日本イメージの変化は、渡航目的（観光か留学か）、イメージの内容（日本人に関するものか否か）、留学中の日本人との交渉の成功経験の有無など様々な要因に左右される可能性が示唆される。ここでは、教師として取り得る対応を考えてみたい。

台湾の大学では言語的側面からの日本語教育が一般的で、卒業するには日本語能力試験合格が必要とされており、日本語力の向上という点に重きがおかれているが、本稿の結果は、留学生の適応問題は日本語力の高さだけで解決できるものではなく、日本人との交渉の成功経験も必要であることを示唆している。しかし、留学生全員がKのように現地に行って自然に要領をつかんでコミュニケーションできるという能力を持つとは限らず、Sのように

コミュニケーションがうまくできない人もいる。これを個々人の性格に起因するものと捉えることは容易であるが、性格という要因を認めてもお教師がとるべきサポートはあるように思われる。つまり、どのような性格の留学生であれ、その人なりの充実した留学生活が送れるようなサポートは可能であると考ええる。このような発想から、Sのような学生が日本人との交渉の成功経験を積み重ねていけるように支援するため、渡日前の段階から、異文化コミュニケーション上で起こる摩擦や対立を認識し対応方法について考える場の提供を提案したい。留学して初めて問題にぶつかり、その解決に多くのエネルギーを注ぐのではなく、事前に問題の発生をいかに押さえるか、また直面しうる問題を予想し、それにどう対処するかを指導することがより良い留学の支援体制となる。具体的には、留学前に留学・交換修了生が感じたカルチャーショックの例を素材とし、日本語会話や日本事情の授業などでロールプレイなどにて、学習者自身に「疑似体験」させるなどの方法が考えられる。このような方法を用いることで、留学のイメージを具体的に描かせると同時に、学習者自身が持った固定観念・ステレオタイプなどに気づかせ、予想と異なる状況に遭遇した時に柔軟に対処できる能力を身に付けさせることができる。以上のような学習の場は、異文化に出会った際の衝撃の軽減につながり、日本人とのコミュニケーションがよりスムーズに進む一助となると期待される。

また、Sのケースのような日本人学生や教職員といった限定的な日本人との接触は、画一化した日本人像に結びついてしまう可能性が考えられる。Kの例のように、教会など学外の幅広い日本人との多種多様な接触を行うことで、異文化や留学生との交流に興味を持っている日本人に出会う機会が増えると思われ。日本に滞在する外国人が増加している昨今、国際交流の場を設けている自治体は増加してきている⁹⁾。Kは自分自身の力でそのような場を見つけたが、自分一人ではそれができない留学生も多いと考えられる。受け入れ側の教育機関が地域のそのような場を積極的に紹介することで、より多くの留学生が問題を合理的に解決できるようなサポートを得られる機会も増えると思われる。

一方で、KとSの事例から日本人と友人関係を作ることができるか否かは、留学生側の一方的な働きかけだけで決まるものではなく、受け入れ側も含めた双方向性の努力が必要であると示唆された。日本人側にも異文化交流

に関心を持たせ、異文化交流に積極的に関わろうとする意識を育成し、日本と他国の学生の相互理解を促進させる教育介入が重要な教育課題であると言える。

本稿は日本留学による日本イメージの変容過程の一端を明らかにしたが、結果は台湾人の対象者2名という限られたデータから得られたものであり、結論を一般化するには調査対象者の人数と国籍を拡大し、検証を積み重ねることが不可欠である。また、本稿が提案している留学の事前教育の効果についても、今後の検討課題としたい。

【参考文献】

- 大西晶子 (2016) 「留学生の受け入れとキャンパスにおける多様性対応の推進－米国の取り組みを踏まえた日本の大学における課題の整理」『留学生教育』21, 55-62
- 甲斐ますみ (1995) 「台湾における新しい世代の中の日本語」『日本語教育』85, 135-150
- 加賀美常美代・守谷智美・楊孟勳・堀切友紀子 (2009) 「台湾の小学生・中学生・高校生・大学生の日本イメージの形成－9分割統合法による分析」『台湾日本語文学報』2, 285-308
- 加賀美常美代・守谷智美・楊孟勳・堀切友紀子 (2011) 「台湾における学生の日本イメージの形成－日本への関心度と知識との関連から」『台湾日本語文学報』30, 345-367
- 加賀美常美代・黃美蘭・小松翠 (2016) 「台湾人の年代ごとの日本イメージと規定要因－国民意識と日本関連情報との接触頻度に着目して」『異文化間教育』44, 98-115
- 篠原信行 (2003) 「台湾の大学生の日本と日本語に関する意識とそのイメージ形成に影響を与える要因について」『日本言語文芸研究』4, 117-137
- 総務省 (2017) 「多文化共生事例集 2017」
http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01gyosei05_02000078.html (2019年6月2日閲覧)
- 内藤哲雄 (2002) 『PAC 分析実施法入門 [改訂版]』ナカニシヤ出版
- 日本学生支援機構 (2018) 「平成30年外国人留学生在籍状況調査結果」http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2016/index.html (2019年5月22日閲覧)
- 日本台湾交流協会 (2016) 「台湾における対日世論調査 第5回調査結果」
<https://www.koryu.or.jp/business/poll/> (2019年6月2日閲覧)
- 葉淑華・王敏東 (2011) 「台湾人留学生の日本留学におけるカルチャーショック－1981～2010年に留学した者を対象として」『台大日本語文研究』21, 223-252
- 守谷智美・加賀美常美代・楊孟勳 (2011) 「台湾における日本イメージ形成－家庭環境、大衆文化及び歴史教育を焦点として」『お茶の水女子大学人文科学研究』7, 73-85
- 國際及兩岸教育司 (2018年) 107年度世界各主要國家之我留學生人數統計
 1080506https://depart.moe.edu.tw/ED2500/News_Content.aspx?n=2D25F01E87D6EE17&sms=4061A6357922F45A&s=5E25E54B80BA4C49 (2019年6月19日閲覧)

国立編譯館 (2003)『認識臺灣〈歴史篇〉』鼎文

- i 第4位にはカナダの5,330人、第5位がイギリスの3,775人となっている。また、留学先をアジアのみで見た場合、第2位のマレーシアが498人、第3位のタイが199人となっており、日本を留学先に選ぶ人が圧倒的に多いことがわかる。
- ii 本稿には金沢工業大学の土田義郎氏が開発したPAC分析支援ツール((S7)20080324バージョン)を使用した。
- iii 調査対象者が持つ現在の日本イメージに影響を与えることを避けるため、まず現在の日本イメージについて話してもらった後、1回目と2回目のPAC分析の結果を提示した。
- iv 『認識臺灣〈歴史篇〉』という教科書に記載がある。
- v 地域社会における多文化共生の啓発のイベントとして周南市観光交流課の周南市国際交流サロン等運営事業、また地域活性化への貢献として、石川県国際交流課の留学生等いしかわ魅力発信モニターツアーなどがあり、このようなイベントは留学生も参加しやすいと思われる。(総務省「多文化共生事例集 2017」)